

# 奏でる隣人 〜翡翠荘奇譚〜

作・演出 萬野 展

## 登場人物

- 荒巻 類<sup>るい</sup> 二一歳。101号住人。産婦人科勤務。(石田)
- 木村琢八 五七歳。翡翠荘管理人。(白尾)
- 森 梢 一九歳。管理人の姪。近在大学生。(才木)
- 伊坂和人 二六歳。102号室住人。劇団虎の子ファイバー団員。(石曾根)
- 桂 直人 二五歳。劇団虎の子ファイバー団員。無職。(真田)
- 日高澄輝 二六歳。劇団虎の子ファイバー主宰。大学生。(澤田)
- 小宮山昌子 二七歳。佇む女1。(武田)
- 真壁葉子 二七歳。佇む女2。(斉藤)
- 隈野裕美子 二七歳。佇む女3。(田中)
- 小田島美和 二二歳。103号新住人。(宮崎)
- 森 ふみ 二二歳。木村邸お手伝い。(広瀬)

\*\*\* 103 / 蜘蛛 / 亀に乗った老人 【シーン1】

舞台上にあるものは、数少ない。  
舞台の床に這う蛍光テープだけが仄蒼く光っている。  
テープは不動産屋の図面のように、三つの部屋の間取りをなぞっている。  
チープな目覚まし時計の電子音が、チープに鳴り響く。  
明るくなる。朝である。  
下手側にはグランドピアノが置かれている。  
ピアノの下には、男がひとり殺人現場のチョコクの跡のようになかった。うつぶせに眠っている。  
中央奥には三角形の小部屋があり、女が三人、いずれも背を向けて座っている。  
この三人はまるで彫刻のように微動だにしない。

扉から初老の男と、大荷物を持った女が入ってくる。  
テープに沿って歩く。そこは廊下にあたる部分である。つ。  
立ち止まる二人。

初老の男 えええ、いち、まる、さん。…いち、まる、さん…。(部屋番号のプレート  
を凝視しているらしい)

大荷物の女 いちまるさんです。(同じくプレートを見ている)

初老の男 あッ、いち、まる、さん。…いち、まる、さん？

大荷物の女 …はい、いちまるさん。

初老の男 あああああ…。(なんだか遠い目をしている)

大荷物の女 ここ、ですよね。

初老の男 あああ、いち、

大荷物の女 まる、

初老の男 まる、

大荷物の女 さん。

初老の男 さん。

大荷物の女 ですね。

初老の男 ええと、あんたあああ…

大荷物の女 小田島です。

初老の男 えええ、おだじまあああ…

大荷物の女 (小田島) いちまるさんに入る小田島です。

初老の男 いちまる…

小田島 さん。…。

初老の男 おおお…。(なにかに感動しているらしい)

小田島 (ややじれて) あの…鍵を。

初老の男 んあ。

小田島 ですから鍵を。

初老の男 …。(珍しい生き物でも見るように相手を見ている)

小田島 103号室に入らせていただきます、小田島美和です。鍵をいただけます？

初老の男 …。(哲人のごとく沈思している)

小田島 …。(途方に暮れてひそかにため息をつく)

扉から姿より先に声が聞こえる。  
若い男がふたり、入ってくる。

若い男1 だからさあ、違うんだよ。ちゃんと聞いてよ。  
若い男2 聞いているよ。

若い男1 あんた、わかってないでしょ、ことの重大さを。  
若い男2 だから蜘蛛がいたんだろ？

若い男1 そうなの。蜘蛛だよ。足が八本、手が八本…

若い男2 それがなんなのよ。  
若い男1 あ、ほら、わかってない。だから人の話ちゃんと聞こうよ。

声高に話しつつふたりは、角を曲がって小田島たちのいる方に来る。  
彼らは小田島が入室に苦闘している103号室の、向かいに入るらしい。

小田島たちとふと目が合う。

若い男1は、小田島たちを横目で見つつ、黙って自室の鍵を開ける。  
102号室に入る男ふたり。

初老の男 …。(相変わらずなにを考えているのかわからない)

小田島 …。(気を取り直して)あ、すみません、鍵を。

初老の男 …。(不思議そうに小田島を見る)

小田島 (精一杯の微笑みを浮かべ)鍵がないと、私部屋に入れませんし、部屋に入れないとせつかく引越してきたのに廊下で暮らさなきゃいけなくなります。

初老の男 …。(ふむふむと聞いている)

小田島 …。(ふむふむと聞いている)

初老の男 …。(同情に満ちたマナザシで相手を見ている)

小田島 …。(難しい決断を迫られているようだ)

小田島 …。(難しい決断を迫られているようだ)

小田島 …。(難しい決断を迫られているようだ)

初老の男(木村) …。(難しい決断を迫られているようだ)

木村、鍵を求めて体中のあちこちを探しはじめる。

小田島 …。(再びため息を洩らして、荷物を持ち直す)

102号室内。

若い男1は、ドアの裏側に立って、耳を澄ましている。

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

…(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男2 …。(難しい決断を迫られているようだ)

若い男1 (伊坂) なに。(相手の顔を見て) …なにその顔。  
若い男2 だめだよ、そついうの。

伊坂 なにが。あんたなに怒ってるの？

若い男2 なんで挨拶しないの。

伊坂 はあ？

若い男2 なんで管理人さんに挨拶しないの。

伊坂 別にいいでしょうが！

若い男2 いいことないだろ。おまえがそついう態度だから今の世の中はね…

伊坂 いいんだよ、だから、あの爺さんボケてるから、挨拶しても無駄なんだよ！そ

んなことより、まずいでしょ！

若い男2 だから、なんで蜘蛛が出たぐらいで大騒ぎすんだ、君は。

伊坂 蜘蛛の話は今はいいの！ 違つんだよ！ 向かいの部屋に、人入って来ちゃうん

だよ。わかってんの？

若い男2 まあちよつといいから上がれよ。

伊坂 おれの部屋だ、おれの！…あのね、日高さん、聞いてる？ 向かいの、103号

室に、新しく、人が、入るんだよ！

若い男2 (日高) けつこ可愛かったね。

伊坂 見てんじゃねえか！ そんなことはどうでもいいの！ あの部屋、今入られたら

どうなると思ってるの！

日高 どうなりますか。

伊坂 荷物！ 置いてあるでしょ！ われわれの二モツ！

日高 あー。

伊坂 あーじゃなくて！

日高 いいから、おまえ、ちよつと、部屋に入れよ。落ち着かないな。

廊下。

木村老人は、どこか深いところから鍵束を発掘する。

木村 あああ…。

小田島 ああ…。(思わず洩れる安堵のため息)

木村 …(不思議そつに鍵束を見ている)

小田島 それ、鍵です。大丈夫です。(なにが大丈夫かわからないが、とにかく老人を

励ます小田島)

102号室内。

伊坂、しぶしぶ日高のそばにやってくる。

日高 それで、蜘蛛がどうしたって？

伊坂 蜘蛛はいいの。蜘蛛の話はまた後で。それよりね。向かいの部屋、劇団の荷物入ってるでしょ。

日高 そつだつて。

伊坂 桂さんが鍵こじ開けて、入れたじゃないか。置く場所ないからつて。ちよつと

置かせてもらっただけだつて言つて、あれ、ずつとあのままですよ。

日高 なにが入ってるの？

伊坂 舞台装置。あとベニヤとか、タルキとか…いろいろですよ。

日高 こないだのヤツ？

伊坂 こないだのも、その前のも！

日高 ここにあつたんだ。どこいったのかと思つてた。

伊坂 めちゃめちゃ無責任なヒトだな…。

日高 けどな、他にいい置き場所ないんだよ。おれの部屋も、桂のとも狭いしな。

伊坂 日高さんの大学に持っていけばいいじゃないですか。

日高 そんなもんあつと言つ間に片づけられちゃうよ。ウチの学校、管理厳しいんだよ。…ここがいちばんいいんじゃないかな。

伊坂 よかないよ。人、来てんですよ！ すぐにでもなんとかしないと！

日高 いいから落ち着け。大丈夫だよ。

伊坂 なにがどう大丈夫なんだよ！

日高 座れ。珈琲いれてやるから。

伊坂 おれの部屋！

日高 おまえの部屋だな。そうだそうだ。（テキパキと珈琲の支度をしている）…あ、

豆、なくなるぞ。買つとけよ。

廊下。

木村老人が、ひとつひとつ鍵を差し込んで試している。

小田島にとっては、悠久の時間が流れている。

小田島 あ…。

木村 …。

小田島 私、やりましようか？

木村 …。（初めて会う人を見るような目で小田島を見ている）

小田島 お疲れでしょう？ 私、かわりにやりましよう。そうしましよう。ハイ。

木村 …。

木村老人、運命そのものに導かれるように、小田島に鍵束を渡す。

小田島、木村老人の浪費した時間を奪い返そうとするかのごとく、テキパキと鍵を試し始める。

102号室内。  
珈琲片手にくつろぐ日高。  
落ち着かなげにドアの外を気にする伊坂。

日高 なんてボケちやつたの？

伊坂 はあ？

日高 あの管理人そんな歳なの？

伊坂 知りませんよそんなこと。

日高 なんかちよつと年齢不詳だよな。

伊坂 じじいの年齢なんかどうでもいいでしょ！

日高 あの人さ、はじめて見たけどここ住んでんの？

伊坂 いやあ、なんか近所のアパートに住んでるらしいですよ。

日高 へえ。

伊坂 なんでもね、昔はそっちのアパートが翡翠荘だったんだって。

日高 ここ翡翠荘だろ。

伊坂 ここはいちおう、正式にはメゾン・ハルシオンって言つんですよ。

伊坂 …。

日高 英語にただけじゃん。

伊坂 アパートではなくてマンションですから、いさおう。

日高 それでなに、こっちが新館ってわけ？

伊坂 うーん、新館っていうとなんか温泉旅館みたいですけどね。

日高 大家もそのアパートに住んでるの？

伊坂 いや、大家は…確か西のほう、九州とか四国とかあっちのほうの人らしいですよ。会ったことないけど。

日高 雇われの管理人てことか。それにしたって、ボケちゃってるんだろ？ なに管理してんだ？

伊坂 管理してないんですよ。してないからおれたちがこうやって好き勝手に…あっ、だから荷物！ どうすんの！

日高 またその話。

伊坂 最初っからその話なの！ あんたはいいよ、ひとんちのことだから、そうやって無責任に構えてられて。おれはどうなの？ 鍵までこじあけちゃってるんだよ。下手したら犯罪じゃない。

日高 芝居のためだ。仕方ないじゃないか。一証人として君の日頃の善良で質素な生活ぶりを涙ながらに陪審員にアピールして、及ばずながら援護射撃してあげるよ。

伊坂 あんた主犯だろ！ アンドここは日本だ、陪審員なんかいねえ！

日高 おお、まとめ突っ込み。

伊坂 だいたい、じっさい鍵開けたのは桂のバカでしょ、おれは被害者ですよ！

日高 確かにあいつはバカだ。

伊坂 だからね、なんとかしてくださいよ。日高さん座長じゃないですか。こんなときくらい役に立ってくださいよ。

日高 えらい言われようだが、まあいい。それじゃなんとかしてやるから、オマエちよっとひとつ走りバカ呼んできな。

伊坂 は？

日高 桂呼んでこいっていうの。

伊坂 なんでよ？

日高、伊坂を呼び寄せる。

日高 あの鍵な、…取り替えちまったんだよ。

伊坂 へ？

日高 桂がな、あんなへなちよこの鍵じゃ危ないからって、錠前ごと新しいのに取り替えちやったんだよ。

伊坂 ……うそ。

日高 ホント。だから今は絶対開かないから、安心して桂探してこい。鍵はあいつが持ってる。

伊坂 ……連れてきてどうすんの？ だって開けたら荷物がザクザク…

日高 耳貸せ。

伊坂 痛たた。

日高、伊坂に計画を耳打ちする。  
廊下。

小田島 ……あの、すみません。

木村 ……(あらぬ方を見ている)

小田島 あの、管理人さん。

木村 ……(あらぬ方を見ている。自分が呼ばれているとは思っていないらしい)

小田島 木村さん。

木村 ……

小田島 これ、違うんじゃないでしょうか。…あの、だいたいこんなたくさん部屋はないし、普通鍵に部屋の番号とか書いてあるんじゃない

木村 これが翡翠の鍵です。

小田島 ……(老人が口をきいたことにびっくりするが、気を取りなおす)は？

木村 翡翠の鍵は昔から、これだけなのでアリマス。

小田島 はあ…。

102号室。

日高 (耳打ち終えて)わかったか？ とにかく俺が時間稼いでるから、オマエは桂呼

んでこい、いいな。

伊坂 (頷いて)わかった。

伊坂、不承不承かつ恐る恐る扉を開けて、廊下の様子をつかがう。  
廊下。

小田島 でも、あの、この部屋の鍵、今全部試したんですけど、ないんです。

木村 鍵は嘘を言わんのデス、それは錠が悪いのデス。

小田島 は？ 錠？

木村 錠が誤っております。

小田島 あの、錠でも鍵でもどっちでもいいんですけど、とにかく、部屋に入れないのは困るんですよ。

102号室のドアから伊坂が顔を出す。

日高 おどおどしてたら怪しまれるだろ、バカ。しれっと行け、しれっと。

伊坂 ……

伊坂、意を決して廊下に出る。

日高 (部屋の中から)じゃあおれマンデリンね、ちゃんとカリタで換えてもらってこいよ。

伊坂 は？ かりた？…あ、ああ、カリタね。うん。

日高 あとフィルターもないから買ってきてね。

伊坂 (小声で)おれ金ないよ。

日高 (小声で)バカ、いいんだよそんなこと。

伊坂 ああ…

とかなんとか言いながら廊下に出ていくふたり。

日高 あ、どつせ。

小田島 ……どつせ。

日高 どうかされました？

小田島 鍵が開かないんです。

日高 アそりやいけな。そりやいけないなあ。なあ！

伊坂 んんっ。そ、そうですそです。

日高 なに言ってるんだオマエは。そういうときはね、あれですよ、あれ。

小田島 はい？

日高 鍵のお巡りさん。な、そつだよな。

伊坂 そつです。

日高 ね、困ったときは鍵のお巡りさん。知ってます？

小田島 知りません。それ何ですか？

日高 鍵のオマワリサンは鍵の専門家です。鍵失くしたときとかにね、頼むんです。すると七つ道具を持って現れて開けてくれるんですよ。ちよっとお金かかるんですけどね。

小田島 かまいません。部屋入れないと困るし。

日高 そつですか。いいですか。じゃあ、おい、ついでにオマエ行って呼んでこい。

伊坂 えっ、おれ。

日高 そつオマエ。鍵のお巡りさん、あつたら、ほら、あそこ。

伊坂 あそこ。

日高 あそこ、あそこだよ！

伊坂 ああああそこ、あそこね。あつた。ありました。

小田島 あの、でも悪いから…

伊坂 いいんですいいんです、買い物ついでです。な！

伊坂 ついでです。

日高 じゃ、頼んだぞ。行け！

伊坂 お、おう！

伊坂、不自然な自然さで歩いていく。

伊坂、入り口の扉より退場。

日高 いったらっしやああい。…さて、じゃあ、ここで立って待ってるのもなんですから、お入りになりませんか。

小田島 は？

日高 いや、結構、時間かかるんですよ、鍵のお巡りさん。予約制だし。

小田島 予約？ 鍵を失くしてから予約するんですか？

日高 いやいや、失くなりそうな日の朝にですね…いやまあ、そんなことは置いといて、珈琲でも出しますから、あいつが戻ってくるまで、どうぞ休んで下さい。

小田島 …じゃあ、お邪魔しようかしら。これからお向かいさんだし…。

日高 そつですよ、お向かいさんですよ。鍵のお向かいさん。どうぞぞつづい。

日高、小田島の荷物を持ってやる。

小田島 あ、すみません。

日高、小田島を先にドアへ。  
立ち戻くす木村と目が合う。



日高 …。  
木村 …。  
日高 … 管理人さんも、よかったら、どうです。  
木村 …。  
日高 … いいですか。

入り口の扉より、スケッチブックを抱いた学生風の女 登場  
廊下を歩いてくる。

学生風の女 あ、いたいた。タクヤくん。

小田島 …？

学生風の女 アパート行ったら、マンションのほうだって言われて、来ちゃった。タックン、今日金曜日だよ。忘れちゃった？

木村 … あああ。

学生風の女 約束の日でしょ？ 思い出した？

小田島 あの…。

学生風の女 あ、ごめんなさい。マンションのお客さんだったんだ。お部屋、見に来たんですか？ やめた方がいいですよ、ここ日当たり悪いし、駅から遠いし、狭いし、出るし…

小田島 もう契約したんです。

学生風の女 あ。

小田島 ええ。

学生風の女 またやっちゃった。ごめんなさい。あたしいつもひとこと多くて。…あの、でも、静かだし、あの、夜とかは日当たり関係ないし…

小田島 ありがとう。気にしないで。あの、それより、今、出るって言った？

学生風の女 えっ、いやっ、その…

小田島 なに出るの？

学生風の女 いや何も。あたしそんなこと言った？ 言ってないんじゃないかな…

小田島 言ったわよ。言ったでしょ。ねえ。

日高 言いましたね。しかしそれよりもまず最初に問題にしなければならぬことがあります。

小田島 なに？

日高 タクヤくん、とは、誰のこと？

学生風の女、黙って木村老を指す。  
指された本人はゼンゼン関係ない方向を熱心に見ている。

日高 …。(あれ？)

学生風の女 …。(そう、あれ)

日高 … タクヤ、くん。

木村 (振り向く)…。

日高 … キムタクってこと？

小田島 … そうらしいわね。

日高 それで、キムタクを彼氏に持つ幸運なあなたは？

学生風の女 彼氏じゃなくて、おじさんのの。

日高 おじさん？

小田島 姪御さんなの。

学生風の女 梢って言います。森梢。

小田島 小田島です。

日高 劇団虎の子ファイバー主宰、日高です。

小田島 虎の子？

学生風の女(梢) フィーバー？ なにそれ？

日高 ある日私が虎の子の一万円札を持ってパチンコ行ったらフィーバーしたという...  
いや、そんなことはどうでもいいんです。とにかく...

伊坂が入り口より戻ってくる。

抜き足差し足で廊下の曲がり角まで来て、様子を窺っている。

日高、伊坂に気づく。

日高 まあ、とにかく鍵のお遍路さんがくるまで待ちましょう。

小田島 お遍路さん？

日高 はああ？ お遍路さん？ そんなこと言いました、ぼく？ ぼくが？ まいったな、疲れてるのかな。

梢 なに、お遍路さんて。

日高 とにかく、とにかくですね、廊下で立ち話もなんですから、部屋に入りましょう。ね。ね。どうぞ。

小田島 そつね...

日高 姪御さんもどうぞ。どうぞ！

梢 え？ ええ...はい。

小田島、梢の順で部屋に入る。

日高 ...。

木村 ...。(目が合う)

日高 キムタク...！

木村、のそのそと部屋に入る。

日高、外からドアを閉める。

伊坂、角を曲がって寄ってくる。

日高 (小声で) なにやってんだオマエは！

伊坂 (小声で) ...ごめん。マンデリンなかった。(といいつつコンビニの袋を渡す)

日高 アホかオマエは！ いいんだよこんなものは！ それより桂は！

伊坂 いねえんだよ！

日高 下宿は！

伊坂 (ノー)

日高 喫茶店！

伊坂 (ノー)

日高 雀荘！

伊坂 (ノー)

日高 ゲーセン！

伊坂 (ノー)

日高 電話はしたのか！  
伊坂 あのらんち電話ないもん。

日高 バカ！ あいつピッチ持ってるだろうが！  
伊坂 え。嘘。

日高 知らんのか！

伊坂 なんてあんな貧乏人が…

日高 歌舞伎町で大きな亀に乗った白い髭のおじいさんがイラン人に取り囲まれてるところを助けたらそのお礼にくれたそうさ。

伊坂 それはぜったい嘘。

日高 とにかく電話しろ！ 電話番号はこの紙に書いてある。

伊坂 用意してんなら最初っから渡せよ！

日高 行けっ！

伊坂、紙を手に入り口に向かう。

日高、部屋に戻る。

入り口からスーパーの袋を抱えた女が登場。  
伊坂とすれ違う。

スーパー袋女 あら。

伊坂 あ、どうも。

伊坂、挨拶もそこそこに入り口から飛び出していく。  
スーパーの袋を抱えた女は、廊下を歩き、伊坂の部屋の隣に入る。

101号室。ピアノのある部屋である。

102号室では、小田島と梢が話している。

かなりうちとけたようだ。

木村老は、スケッチブックになにことが描きつけている。

日高 いやあ、どうも。なんかお話はずんできますね。

小田島 梢さんて面白いわ。

梢 そうですか？ あたし、ダメなんですよ、性格が大雑把だから。

小田島 そういっほつが患者さんも安心するんじゃない。

日高 患者さん？ 看護婦さん？

梢 患者じゃなくて、クライアント。

小田島 梢さん、カウンセラーなんだって。

日高 はあー。

梢 卵よ、タマゴ。短大でその手の勉強してるってだけ。

日高 ああ、そうなんだ。でも、プロになる？

梢 そういっほつ仕事につけたらいいなあって思ってますけど。

小田島 それで、あれ。

日高 あれ…なにしてるんですか。

梢 タクヤくんね、毎週金曜日、クライアントになってもらってるの。

日高 キムタクに？ キムタク、練習台？

梢 まあ、そうね。

小田島 ああやっつてね、心に浮かんだことを、自由に、何でもいいから紙に書かせてみるんですって。

日高 心に浮かんだこと…それは…なんだかとも見てみたい気がしますね…。

日高、そつと木村の背後に近寄る。

木村 …。(気配を察して振り返る。世にも恐ろしい顔をしている)

日高 …あ(凝固)。……どつぞ。(と意味不明なことを言っ戻ってくる) …いやあ、なんか今、石にされてしまいそうでした。

小田島 ダメよ、邪魔しちや。

日高 真剣ですね。

梢 いつも、ああですよ。

日高 どんなこと書くの？

梢 だいたいは意味のない落書きみたいなこと。でも、意味はきつとあるのよね。彼にとつては。それがわからないだけで…。

日高 アタタカク見守っていきましょうか。

小田島 そつね。

日高 …。

小田島 …。

梢 …。

この会話の間、同時に101号室では、スーパー袋女がピアノの下の男(この男はずつとここで寝ている)を起こそうとしていた。

しかし男はなかなか起きない。

女は男を無理矢理起こし、買ってきたヨーグルトなんかを甲斐甲斐しく口に運んでやったりしているが、男はすぐに寝てしまう。

どうやらこの二人は同棲している雰囲気である。

女はやがて男を起こすのを諦めて、ピアノの前に座る。

たどたどしい、しかしどこかもの悲しいピアノの音が部屋を満たす。

ちょうど102号室の会話が途切れる。

突然、寝ていた男のからだのどこかで、PHSの音が鳴る。

女、ピアノをやめ、再び男を起こす。

スーパー袋女 ねえ。ねえ。起きて。なんか鳴ってるよ。

ピアノ下男 ねえ。ねえ。起きて。なんか鳴ってるよ。

スーパー袋女 ヨーグルトじゃなくて、電話。電話鳴ってるわよ。

ピアノ下男 …んん…(電話出る)…はい、桂です…。

女は、男のそばに座って、彼を見ている。

ピアノ下男(桂) …なに…なに言ってるの…ちよつと落ち着けよ…はあ?…鍵?…

鍵がどうしたって?…ちよつと待って待って…あのさ…あんた、誰?…はあ?…

ああ伊坂か…なんだなんだ、元気が。久しぶりだな。…なに、どうしたの…オ

マワリサン?…何言ってるんだオマエ…もしもし…もしもおし…あれ…

スーパー袋女 切れちゃったの?

桂 うん。まいつか。

スーパー袋女 この部屋電波入りにくいんだよ。見せて。

女、桂からPHSを奪つ。

スーパー袋女 ホラ、アンテナいっばんしか立ってないでしょ。

桂 ー。(なんとなく自分の下半身を見る) もういっばん立ってる…。

スーパー袋女 …バカ! (立ち上がって逃げる)

桂 いやちよつと。待てよ。(行きがかり上、立ち上がって追う) 類! 類ちゃん。

スーパ―袋女(類) ダメ、圏外!

桂 やろつよ、とりあえず。

類 ダメ、あたしピアノ弾くんだから!

桂 あ、そつ。弾けよ。

類 弾くよ。

桂 おれ、ここで聞く。

類 よし、そこで聞け。

桂 ピアノの下に潜り込む。

女、再びピアノを奏ではじめる。

たどたどしい旋律。それは、古くもの悲しい狂想曲のようだ。

102号室。

小田島 あ、ホラ、やっぱり。

梢 ホント。

小田島 ピアノが聞こえる。

梢 隣からみたいね。

小田島 ピアノなんか持ち込んでいいの? このマンション。

日高 なんでもありませんか?

101号室。

類 ねえ。

桂 ん?

類 なんか話して。

桂 なんか? なんの話?

類 なんでも。なんでもいいよ。

桂 なんでもいい? そついうのいちばん難しいんだよ。

類 いいから。

桂 そつだなあ。

102号室。

小田島 なんでもありつて言えば…梢ちゃん。

梢 ハイ?

小田島 何が出るつて?

梢 まいったなあ…余計なこと言っちゃったなあ、あたしつてば。

小田島 出るつて言えばだいたい見当つくけどね。

梢 あたしもよく知らないの。ただ、このマンションには、出るつて、それだけしか…

小田島 どんなのが出るの?

梢 そこまでは…知らない。

日高 私がかわつてお話ししましょうか。

小田島 日高さん、知ってるんですか。

日高 知ってます。

小田島 じゃあ話して。

日高 ではリクエストにお応えして。まあ、出るっつえば、モノは幽霊と決まってる。どんな幽霊かというところ…

小田島 言うところ…

日高 これが一寸変わっているんです。女の幽霊です。若い女。

小田島 …別に普通じゃない？

日高 そう、しかしこの女は目隠しをしている。

小田島 目隠し？

日高 そしてそれがひとりじゃない。三人。

小田島 目隠しをした女の幽霊が三人？

日高 そうです。

小田島 なんかわかんないけど、怖そうね。

梢 それで、その人たち、なにするわけ？

日高 なにも。

梢 なにもって？

日高 ただじっとしているんです。

梢 じっとしてるだけ？

小田島 じっとしてるだけ…

梢 …それで？

101号室。

類 じっとしてるだけなの？

桂 そう。じっとしてるだけなんだ。

類 それで？

全体の照明が少し変化する。

中央奥でじっと佇んでいた女たちが、ゆっくりと立ち上がり、振り返る。

三人の女の目を、黒い布製の目隠しが覆っている。

夕闇が、迫っている。

\*\*\*じゃこ出汁／描く隣人／奏でる隣人 【シーン2】

振り返った女たちは、いちように黒い目隠しをし、少し時代がかった長いスカート  
を穿いている。  
彼女たちは、床の間取りラインをまったく無視して動く。

佇む女1 休憩にしません？

佇む女2 そうね、休憩にしましょう。

佇む女3 朝御飯も召し上がりません。

佇む女1 あなたもお疲れでしょう。

佇む女2 あまり根を詰めすぎない方が…。

佇む女3 休憩に、しましょう。

佇む女たち お疲れさまでした…。

彼女たちは、お互いではなく、客席方向の「誰か」に向かって話しかけている。  
女たちは思い思いに、腕を伸ばしたり肩を叩いたりして、体をほくしている。

佇む女1 さ、朝食にしましょう。

佇む女2 そうしましょう。

三人は目隠しをしているにもかかわらず、不自由なくすらすら動き、床に座って手  
弁当を広げる。

佇む女1 ねえ、葉子さん。今日のおかずはなあに？

佇む女2 (葉子) 今日はね、白菜と烏賊をじゃこだして煮つけてみたの。それに鹿尾

菜とお漬け物。昌子さんは？

佇む女1 (昌子) わたしなんていい加減なものよ。鰯の煮つけでしょう。ほつれん草  
の卵どじに甘藷の衣かつぎ。みんなゆうべの残りもの。裕美子さんは？

佇む女3 (裕美子) チーズバーガー。

類・小田島・梢 チーズバーガー!?

桂 うん。

梢 なんていきなりチーズバーガー？

類 なんか変じゃない、それ？

日高 まあ幽霊のすることですから…。

小田島 それで？

類 それで？

女たちは、手弁当を食べ終え、お茶を飲んでいる。

女たち ぐちそうさまでした。

昌子 いい天気ねえ、今日は。

葉子 ほんとう。

裕美子 お庭にでも出してみませんか？

昌子 そうね。

葉子 そうね。

女たち、移動する。

昌子 ああああ、いい気持ち。  
裕美子 すっかり夏ねえ。

葉子 日に焼けてしまえそう。

昌子 いいじゃないの、お焼きになれば？

葉子 もうこの年齢ですもの。

昌子 あら、この年齢ってどの年齢？

葉子 この年齢はこの年齢よ。いやな方ね。

昌子 だって同じ年じゃないの、あたしたち。あなたがそんな年齢なら、わたしだって  
こんな年齢よ。

葉子 ……それもそうね。

裕美子 (呆れたように笑って) 平和ねえ。

女たち、一瞬あっけにとられ、顔を見合わせて笑う。

昌子 平和はよかったわね。

葉子 そうねえ。

昌子 でもほんとうにそうね。こうしていると…日本が戦争してるなんて、まるで夢み  
たい…。

小田島・梢・類 戦争!?

日高 はあ。

小田島 そんな昔の人なの？

日高 そういうことですわねえ。

梢 ますますチーズバーガー怪しくない？

日高 忘れてください、それ。

女たち、くつろいで雑談を続けている。

葉子 ねえ、ご存じ？ 東京では歌舞伎座も明治座も、みんな焼けてしまったんですって。

昌子 お芝居もしばらくは見られないわ。

葉子 戦争が終わるまでは。

裕美子 終わるのかしら…。

昌子 終わり方によるわね。

葉子 勝てば…。

裕美子 勝てるのかしら…。

葉子 ……。

昌子 ……。

女たち、かたとき、淡い沈黙に沈む。

裕美子 ねえ、ほら、またピアノが聞こえるわ。

昌子 お隣さんね。

葉子 翡翠のお屋敷からよ。

裕美子 素敵ねえ。

葉子 大丈夫なのかしら、こんな時期に。憲兵隊にでも聞かれたら大騒ぎになるわよ。

昌子 こんな山奥に憲兵隊なんかこないわよ。

裕美子 ねえ、行ってみたいこと？



葉子 どこへ？  
 裕美子 お隣。  
 昌子 翡翠荘へ？  
 裕美子 あのピアノ、そばで聞いてみたいわ。

女たち、顔を見合わせているが、やがて、顔き合つ。  
 女たちは揃つて、ピアノの部屋に入る。  
 そこは101号室と呼ばれた空間である筈だった。  
 虚実の皮膜が、なし崩しに溶解していく。

昌子 こんにちは。

葉子 お日柄もよろしくて。

昌子 不躰におうかがいして、ごめんなさいね。

類 え、え、うそ、どうして？

葉子 どうぞ、お続けになって、ピアノ。

昌子 こんな可愛らしい娘さんが弾いてらしたなんて。吃驚だわ。

類 あれエ、可愛らしいだつて。…桂、聞いているかあ？

桂 社交辞令というものですよ、お嬢様。

昌子 突然お邪魔してすみません。小宮山昌子と申します。

裕美子 隈野裕美子と申します。

葉子 真壁葉子でございます。

類 あの、あの、荒巻類です。こんにちは。

女たち こんにちは。

昌子 いつも、ピアノ聞いてますのよ。お隣で。ねえ。

葉子 ええ。

類 恥ずかしいです。好きなだけで、下手だから。

昌子 そんなことないわ。お上手よ。ねえ。

葉子 ええ。

裕美子 お続けになつて。

葉子 どうぞ。

昌子 どうか。

類、再びピアノに向かう。  
 女たちは床に座って聞き入る。

小田島 その、もうひとつの翡翠荘にもピアノがあったの？

日高 はい。

小田島 不思議な偶然ね。

日高 ええ、不思議な偶然ですね。

類のピアノが続いている。  
 女たちは取り囲んで聞いている。

桂 さて皆さん、お茶でもお持ちしましょうか。

昌子 あら、いいえ、どうもお構いなく。

桂 お隣のご主人のご機嫌はいかがですか。

葉子 ええ、それは熱心に打ち込んでらっしゃいますわ。

裕美子 どうかすると朝から晩まで、休憩もとらずに。

昌子 まるでなにかにとりつかれたみたいに。

類 ねえ、お隣ってなに？

桂 お隣は木村画伯の別荘ですよ。

類 がはく…。あ、じゃあ、三人ともモデルさんなんだ！

昌子 ええ。

類 ふうん…。

類、ピアノを弾き続ける。

小田島 木村画伯…。

日高 はい。

小田島 木村って、木村…？

日高 はい。

梢 あたし、聞いたことある…。

小田島 なにを？

梢 タクヤくんのおじいさん、画家だったんだって。

小田島 じゃあ木村さんも…昔の翡翠荘に…

梢 そこまでは知らない…タクヤくんの昔のことを知ってる親戚って、ひとりもいないの。

小田島 ひとりも…どうして？

梢 みんな戦争で亡くなったって…それだけしか…

小田島 みんな…

梢 そう、みんな…

小田島 みんな。

昌子 みんな。

葉子 みんな。

裕美子 みんな。

桂 みんな。

木村 みんな。

別人のように沈痛な木村の声をきっかけに、ピアノがやむ。

沈黙。  
その沈黙を類が破る。

類 …みんな？

木村 そう、みんな。

類 みんな、どうしたの？

木村、スケッチブックを手にしたまま立ち上がる。

木村 その時、わたしもそう言った。

類 その時？

木村、ラインを無視してゆっくりと中央へと歩く。  
スケッチブックを胸に抱え、その場に膝をつく。

類 その時っていつ？ あなたは誰？

女の声 タクヤ坊ちゃん！

ドアより女登場。  
 遠くから木村に声をかける体。

女 (女はやさしく木村に声をかける) いけませんよ、お邪魔しちゃ。そっちはお隣。木村 ふみの声でした。ふみはいつも口うるさい。でも優しく。いつでも、わたしに優しく。いつでも、わたしに優しく。

昌子 あらあ、タクヤちゃん。早起きなこと。

葉子 おんもにお出かけ？

裕美子 お隣さんまで来ちゃったの。

女たち、木村を囲む。

葉子 肌身離さずお絵かき帳持ってるのねえ。

裕美子 小さな画家さんねえ。

昌子 今にきつとお父様のようにじょうずになるわよ。

ふみ、木村においつく。

女(ふみ) すみません。朝御飯の片づけで、ちょっと目を離した隙に…

葉子 あら、ふみさん。ご苦労様。

昌子 大丈夫よ、あたしたち見ているわ。

裕美子 タクヤくんもピアノを聞きたいのよね。

ふみ でも、あの、お邪魔では…

桂 かまいませんよ、少しお休みになっていかれたら。ねえお嬢様。

類 …。どうして…

ふみ そうですか。ありがとございます。

昌子 さあ、タクヤくん、おばさんたちに小さな画伯の作品を見せてちょうだい。

葉子 あらあ、見たいわとて。ねえ。

裕美子 ええ、とて。

女たち(ふみ除く) 見たいわ。

類 どうして…

木村、スケッチブックをめくる。  
 女たち(ふみ含む) はそれを微笑ましげにのぞき込み、なにことが言い合って笑っている。

小田島 どんな絵？

梢 動物。

小田島 動物…。

梢 動物…黒い動物…何度も…。

小田島 黒い…動物…。

梢 (立ち上がりつつ) そう見える。何度も出てくる。駱駝のようなコブがあって、足が三本の…動物…動物？ 本当に、それは動物なのだろうか。

類 どうして…

木村、ページをめくる。  
梢はゆっくりと中央奥へと移動している。  
その声は最前までの明るい女子学生の声ではない。  
虚実の境界線は、今やあちこちで綻び、錯綜し、侵犯しあっている。

梢 いいえ、違う。あれは動物じゃなかった。三本の足。駱駝のようなコブ。それは…  
小田島 ピアノ…。  
梢 そのそばにうずくまっているように見える子供。あれは…彼自身。  
木村 ピアノが聞こえていた。ふみがいた。三人の、よく笑う女たちがいた。みんな笑っていた。  
類 どうして…！

類は泣くような声で問う。  
木村、ページをめくる。  
新たなページに女たちは楽しげに笑う。(ここは無音)  
日高はもはや物語ってはいない。口をつぐみ、無表情にどこか彼方を見ている。  
小田島は辛うじて現実に爪先でとどまりながら、問い続ける。  
そこにはいない誰かに。

小田島 どんな絵？

梢 雲。空いっぱい広がっている雲。それが、真っ赤に塗りつぶされてる…。そう見える。

類 どうして目隠しをしてらっしゃるんですか！

すべての動きが静止する。  
木村、スケッチブックをぱたりと閉じる。  
沈黙。

昌子 ふみさん、今、なんどきかしら。

ふみ 八時を少しまわりました。

昌子 ……そう。

葉子 もう、あまり時間がないわ。

裕美子 そつね。

女たち、散って、床のテープを剥がし始める。  
空間は、区切りのない、均質なものとなってゆく。

類 どうして目隠しをしているの、お願い、答えて！

女たち答えず、テープを剥がし続ける。

木村 当時、わたしは五才。それは五十二年前のことだった。

類 どうして答えてくれないの！

昌子 さあ、お弾きになつて。

桂 さあ。お嬢様。

類 あたし、あまり弾きたくない…

昌子 さあ、どうか。

裕美子 どうか。

葉子 どうか。

類 弾きたくないのよ！

女たちは木村を囲むように中央に集まっている。  
その後ろに、桂、梢、日高が近づく。

昌子 目隠し？ いいえ、私たちは目隠しなどしていない。

裕美子 目隠しをしているのはあなたがたのほう。

昌子 よくご覧なさい。

裕美子 よくご覧なさい。

葉子 よくご覧なさい。

昌子 よくご覧なさい。

類 誰か…。

後ろの三人は前三人の目隠しを、ゆっくりとはずしてゆく。

木村 そのとき、わたしはピアノを聞いていた。翡翠荘の娘が弾くピアノを聞いていた。スケッチブックを抱えて、ピアノの陰で膝を抱えていた五才のわたし。わたしのだけが、残った…。

三人の佇む女たちは、前を、そして少し上を、瞬きもせず凝視している。

ふみ もうじき、やってきます。

昌子 千九百四十五年。

裕美子 八月六日。

葉子 午前八時十五分。

木村 そのとき町に、光があふれた。その瞬間わたしの目にはなにも映さなくなった。ただ耳の奥で、ピアノの音が、ずっと、続いていた。

昌子 さあ、お弾きなさい！

裕美子 お弾きなさい！

葉子 お弾きなさい！…さあ。

類 (鞭のような声に押され、鍵盤に手を近づける、が) いや！ 弾きたくない！  
誰か！ 誰かいないの！

人々は蜘蛛の子を散らすようにさっと散り、再び虚空の一点を睨んで振り返る。  
遠い天空の一点から、爆撃機が飛来する高音が、ゆっくりと近づいてくる。  
その時、弾かれたように小田島が立ち上がる。

小田島 弾いちゃ駄目っ。

類 あ、あなた誰？

小田島 誰でもいいわ、とにかく弾いちゃ駄目！

類 でも、でも、この人たちが！

小田島 なんでもいいからしゃべって、あなたのこと、生活のこと、知ってること、なんでも。しゃべるの！

類 なんでもいいって、そういうのいちばん難しいんだから…ええと、ええと、荒巻類、二十一才、産婦人科勤務！…ええと、し、子宮癌の転移でもっとも多いのは、浅鼠経リンパ節転移、骨盤リンパ節転移…検査方法は腎盂尿管造影…

小田島 もっと明るい話題ないの！

類 ええっ、明るい話題…だってそういう職場なんでもん…ええと、ええと、あの、でも出産があるときは好き、赤ちゃんの泣き声って素敵。音楽みたい。

小田島 じゃあ、その曲を弾いて。

類 え。

小田島 その曲を弾いて！ 早く！

類 うん！

類、ありふれた子守唄をただどしく弾き始める。  
飛来する爆撃機の轟音に負けそうになり、次第に叩きつけるように弾く。  
人々は、ふとその曲に反応して顔を上げる。

類 眠って！

遠くで赤ん坊の泣き声が聞こえる。  
人々の表情に、それまでと違うなにかがあらわれる。

小田島 眠って！

類 眠って！

小田島 もう想い出さなくていい。もう全部終わった。もう終わったの。ほら、聞こえるでしょう、あの声が。目を閉じて。…そして、眠って。…どうか。

人々は、赤ん坊の声に聞き入るように、目を閉じる。  
類はいつしか微笑んでいる。  
人々は、糸の切れた人形のように、ゆっくりと、床に崩れ落ちてゆく。  
爆撃機の轟音は遠退き、暗くなっていく。  
すべての人たちは、闇に溶けていく。

明るくなる。

四人の女たちと木村が、広い部屋の中に立ち、あるいは座り、それぞれが彫像のように凝固している。

いずれも顔は見えない。

小田島、何もない床の中央に立っている。

その傍らには伊坂がいる。

小田島、肩から荷物を下ろす。

伊坂、ぺこりとアタマを下げる。

伊坂 … ホント、すいませんでした。

小田島 (多少皮肉っぽく) いいえ。

伊坂 ちゃんと掃除もしましたから。

小田島 どうも。

伊坂 それじゃ…ええと…これで。

小田島 これからよろしく、おとなりさん。

伊坂 (照れ笑い) いやあ、こちらこそ。…あ、そうだ…あの、たぶん見間違いだと思  
うんだけどね…

小田島 なにか？

伊坂 いやあ、蜘蛛がね。

小田島 くも？ くもって、足が八本…

伊坂 そうその蜘蛛。蜘蛛が出るんで、まあ、その気をつけて。

小田島 蜘蛛くらい平気よ。

伊坂 いや、それがその…背中がね…

小田島 …背中？ 蜘蛛の？

伊坂 そう、蜘蛛の背中。背中がね…あのう…赤かった…。

小田島 (一瞬何のことかわからない。やがて気づいて) ……ああ。  
伊坂 うん。

小田島 (笑って) まさか。

伊坂 (笑って) まさかね。俺、どうも心配性なんだ。

小田島 そんなことありましたね。

伊坂 そう、そんなこともありました。

小田島 すぐ忘れちゃうわね、そういう事件って。

伊坂 それじゃ。

小田島 それじゃ。

伊坂、去りかける。

伊坂、ふと振り返る。

そこになにかが居る気配を感じたようだ。

しかしそれは気配以上のものにはならない。

伊坂、背を向けて退場する。

小田島 ……ふう。荷物を置いたらけっこつ狭いかな。……………警沢か。

小田島、部屋の中央に座る。

どこからか、ピアノの遠い音が聞こえてくる。

小田島 ……。

音に気づいて、視線を宙に投げる小田島。

ピアノの音の向こうに、遠い飛行機の音が聞こえる。

彫刻たちの顔が、ゆっくりと、いつせいに動き、同じように虚空を見上げる。

ピアノの音が高まる。

部屋は暗くなっていく。

幕。